

## 目的

- 東北の農村地域では、農業の担い手・後継者不足や耕作放棄地の増加など深刻な問題に直面。
- 農業は、東北の魅力を高める大切な産業で、同時にわが国の食料自給を支える意味からも重要。一方、豊かで美しい農村環境を守り、農村社会の持続的発展を図ることは大きな課題。
- 東北の農村地域が保有する多様な豊かな資源により高い付加価値を与え、交流人口・関係人口の拡大を通じて農村地域の活性化を図るための切り口を探るため、本調査を実施。

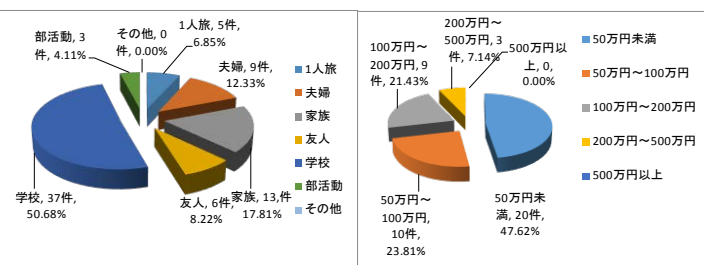
## 仮説

- 農村地域が広く社会（人々）に提供できる新たな価値を創造することで、新しい交流人口・関係人口拡大を図る。
- その糸口に、都市と農村の交流を促進する「アグリツーリズム」（わが国では「グリーンツーリズム」と称することが多い）に着目し、従来とは違った、いわば新型のアグリツーリズム・モデルの可能性を検討。

## 実態把握

- わが国のアグリツーリズムは、従来、修学旅行など若年層団体客向けの農家民泊・農業体験が中心で、概して利幅の薄いビジネス構造。
- 「農山漁村余暇法」（1994年施行）により、各地に「都市農村交流施設」（国の支援で建設され、農家が運営する農村複合観光施設）がつくられ、この施設を利用する形態が広がったが、依然として教育旅行等の団体客を中心とした薄利ビジネスに留まり、経営状態や担い手の数も厳しい状況。
- このままでは、農村地域のコミュニティの存続が危ぶまれ、現行アグリツーリズムも縮小の一途が懸念。

表1 都市農村交流施設における宿泊客種別および売上高(2013年度)



### 【左図のポイント】

- ◆年間売上高は、50万円未満が48%と最も多く、国からの各種交付金等に頼る脆弱な経営状態
- ◆宿泊客の種別では、学校が51%と最も多く、主な客層は教育関連団体客

（出所）農林水産省、2015、『都市農村交流に係る市場規模等調査』、農林水産省、4-107頁をもとに活性研作成。

## 課題

- 農家主体でサービスを提供するこれまでのアグリツーリズムのやり方では限界。（国の支援がなくなったら持続不可能）
- ハコモノ（交流施設等）中心の発想で、顧客ターゲットの捉え方などを含め、これまで行ってきたサービスの枠組みから脱却できず、経営的視点が足りない。
- 本来、農村が保有する豊かで多様な資源（自然・食・伝統文化等）を活かしきれず。



## 可能性

- 東北の農村地域には、他の地域に引けをとらない豊かな自然や食文化・伝統文化等、魅力的な資源が多く存在。
- 新幹線・高速道路などの高速交通網の整備が進み、都市と農村の時間距離が縮小。
- 消費トレンドが「モノ（所有）」から「コト（体験）」にシフトし、観光サービス分野においても、多様な体験型ニーズが発生。
- 少子高齢化等に起因する様々な社会課題を解決する新しいビジネスモデル開発が本格化しており、農村もこれに応えることで、新しい発展の機会を獲得。

## 方向性

- 従来の観光イメージから一旦離れ、各農村地域固有の資源がもつ潜在性を引き出し、広く社会のニーズに応えながら、交流人口・関係人口の拡大が図れる新しいアグリツーリズムのモデルを開発
- 地域内外の組織（人々）とのネットワークを形成し、多様な人材との交流・連携を通じて新しいビジネスモデルとパートナーシップを創出
- 高付加価値なサービスの提供により、客単価が高く（利益確保）、継続して利用してもらえる優良な顧客層の取り込みを図る

## 上山市のクアオルト

### 地域周辺の自然環境を有効活用した、科学的見地に基づく健康増進プログラムの提供

- 科学的根拠に基づいたクアオルトによる健康増進効果（※注1）
- 地域の丘陵地や山岳地域等の地形を活用した健康増進の取組み
- クアオルト先進国であるドイツの専門家によって認定を受けたコースや専門ガイドの育成（※注2）
- 近隣地域に住む一般市民や大都市圏の企業社員による健康増進を目的としたクアオルトの利用
- 高齢化社会に付随する医療費の増加抑制のための健康増進の取組み

（注1）クアオルト（Kurort）とは、ドイツ語で、クア（Kur）「治療や療養、保養のための滞在」とオルト（Ort）「場所・地域」を合わせた「療養地・健康保養地」の意  
 （注2）ドイツでは、クアオルトを「高品質な長期滞在型の療養地」として認識している。日本で唯一認定されたクアオルト健康ウォーキング・コースを持つ。

※両者のアプローチが結合すると、各地域固有の魅力的な「新型アグリツーリズム」モデルの創出が進む可能性あり

## 事例紹介

## くりはらツーリズムネットワーク

### 内外の異分野交流によるネットワークを活用した、地域資源の「気づき」創出

- 地域内外の多彩な技能を持つ人々をつなげることで、地域固有の資源を使った多様なアプローチが可能
- 地域内外の多様な技能・能力をもった人々とのつながりを作ることで、社会的学習の環の拡大
- 地域に新しい価値に対する「気づき」が湧き起こることで地産地消および交流人口の拡大
- 自分たちしかできないことをユニークなサービスモデルとして確立
- 他の地域においても、同様に自分たちの地域に存在する価値の発見（※気づき）をすることで地域活性化への道筋をつけることが可能

写真1. クアオルト「蔵王高原坊平コース」(冬季)



（出所）活性研撮影。

写真2. クアオルト「蔵王高原坊平コース」(夏季)



（出所）活性研撮影。

写真3. くりはらツーリズム・レンコン収穫体験プログラム



（出所）（一社）くりはらツーリズムネットワークHP参照。

## 本調査で得た示唆

1. 従来の観光の枠組みから発想を広げ、農村地域がもつ固有の資源を活用して、社会に新たな価値を提供するモデルを創出することによって、新たな顧客層の取り込み（交流人口・関係人口の拡大）が図れる。このモデルを「新型アグリツーリズム」と呼称。
2. （山形県上山市の「クアオルト」のような）社会的課題・ニーズに応えた新たな価値の提供と、（宮城県栗原市の「（一社）くりはらツーリズムネットワーク」のような）内外の多様な人材とのネットワークを形成し地域の魅力を高める取組みが結合することにより、各農村固有の資源を上手く引き出した「新型アグリツーリズム」の可能性が開ける。